玉上〈三人の作者〉説の語用論的意義

福沢将樹

はじめに

玉上琢弥の「物語音読論」の一環として、〈三人の作者〉説が提示されている。本稿は言語研究者の立場からこの説の理論的検討を試みるものである。

第一章　玉上の〈三人の作者〉説

第一節　玉上の作者論

ここでは玉上琢弥の〈三人の作者〉説の概要を述べる。この説は「物語音読論」と合わせて論じられ、後の研究史では「草子地論」と深く関連するものとして解釈されて批判・発展を遂げてきた。既に的確な纏めはいくつもなされているが、[注一]改めて纏めてみる。

直接〈三人の作者〉について述べたものは、「源氏物語の読者――物語音読論――」と題された一九五五年の論文である（玉上（一九六六）所収）。玉上に先立って今井（一九五四）が発表されており、そこでは「話す人」「聞く人」「書く人」[注二]という三つの概念が示されている。玉上はこれを見る機会はあったかもしれないし、独立に構想されたも

のかもしれないが、いずれにしろ、一九五〇年に発表された「物語音読論序説――源氏物語の本性（その一）――」や一九五三年の「屏風絵と歌と物語と――源氏物語の本性（その三）――」などと一連の構想であることがわかる。

「三人の作者」とは、次のような三人である。

（1）・語り伝える古御達
　　・筆記・編集者
　　・読み聞かせる女房

現存する本文は「読み聞かせる女房」の台詞、つまり「上演台本」なのだが、光源氏らを直接知っていて思い出話をする「語り伝える古御達」の話を「筆記・編集者」が聞いて、記録し、編集を加え、その本文を元にして「読み聞かせる女房」がある程度の自由裁量を加えつつ朗読して「観照者」たる姫君に読み聞かせる、という筋書きである。この仮説の証拠としては「とぞ」という表現や、各種の草子地の類が挙げられている。

ここで注意される点は、これら三つの関係がそれぞれ〈実体〉として「別人」であると読めることである。言い換えれば同一人物の担いうる異なった〈機能〉であるとは言い切れないのである。

一方、読者にも二種類あるという。

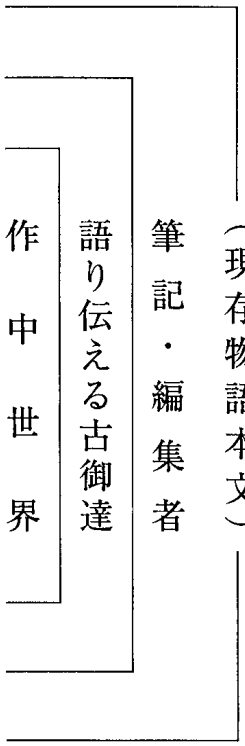
（2）・真の読者（上の品の姫君）
　　・女房（姫君に読み聞かせる）・中の品（テキストを読む）

ここで注意すべき点は、二人目の読者である女房は「作者」の「読み聞かせる女房」でもありうるということである。つまり一人の人物に一つの役割が固定されているわけではないということになる。しかし「作者」の三人の関係、「読者」の二人の関係は、どうやら〈実体〉として別人が想定されているようである。但し、「宮仕えに出た中の品の女、すなわち女房は、姫君に物語を読み上げて聞かせ、作って聞かせ、書き写して進める［中略］。彼らは、演者になり、作者になる」（二六五頁）という記述があり、これは一見、一人の人物が兼ねることのできる〈機能〉であること

を表しているようにも見える。しかしここでいう「女房」は特定単数の「女房」ではなく、集合としての「女房」（の各一人）である可能性が高い。

以上のような理論を、玉上（一九六六＝一九五五）では次のような図で表している（二五七頁）。なおこの図は玉上（一九六〇）では微妙に異なる（後述）。

（3）



第二章　〈三人の作者〉説に対する批判

以上のような玉上説に対して、多くの批判が提出されている。以下、はっきり批判しているものだけでなく、対案を示すに止めているものも若干取り上げる。

第一節　主な批判点

第一項　一人で行う

最も目立つ批判としては、三人を想定する必要はなく、一人で十分ではないかというものである。

中野（一九七一）は「物語音読論」自体をも批判しているが、ここでは三人の作者説に対する批判に絞る。中野の

論点は、『源氏物語』の草子地を検討すると、「作者」(注三)には「客観的超越的立場」という発言の姿勢があるということである。そして「直接的見聞形式」の姿勢と「間接的伝達形式」の姿勢もあるが、全ては第三の「客観的超越的立場」の作者の「技巧」であるとし、別人として分かれているのではないとするのである。その結果「読み聞かせる女房」の存在を疑問視する。藤村（一九六六）・栗原（一九八八）もまた「読み聞かせる女房」の存在を疑問視する。

一方、吉岡（一九九六）は近侍した女房が自ら書いたと考え、「筆記・編集者」の存在を疑問視する。また「読み聞かせる女房」の存在も否定しようとしている。

高橋（一九八二）（一九九一）は作者を「黒衣」「もののけ」に譬え、作品世界内で見聞し、登場人物の心中に一体化し、全知の視点にもなるという作者像を提示している。また金岡（一九八九）は作者が「変身」するとしている。三谷（一九八九）もまた最上位に〈話者〉という機能を想定する。この「〈話者〉」という存在は、「読み聞かせる女房」のような存在とはかなり異なる抽象的な存在である。

第二項　より多くの分類

青山（一九六五）では、三つの枠ではなく、同時に二つの「作者」を兼ねた分類枠を示している。全体を「表現主体」という主体で統一して扱うが、第一項の諸説と異なり、玉上説を生かそうとしているようなので、別だてにした。これはむしろ〈三人の作者〉を〈機能〉として理解しているものと考えられる。

（4）・見聞者

・見聞者と筆記編集者を兼ねる

・筆記編集者のみ

・伝達者（音読者）が語りを伝達

・伝達者が筆録を伝達

・表現主体自身の批評・感想・注釈

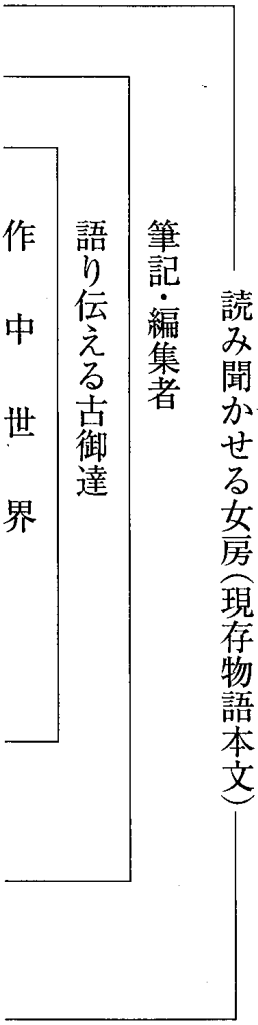
・作中人物と表現主体の感情移入
・超越的視点

三谷（二〇〇七）では五人の「語り手」の人物像が示されている。但し帚木三帖を対象にした考察であり、『源氏物語』全体に亘るものかどうか不明である。

第三項　現存物語本文の枠線

栗原（一九八八）は（3）の図に対して詳細な検討をし、「図そのものに内在する問題」を指摘する。その問題とは、第一に、図中の「現存物語本文」から「読み聞かせる女房」が除外されていることである。そして同様のことを同氏は「筆記・編集者」と「語り伝える古御達」についても当てはめて考えてみる。すると、これらの「作者」についても「現存物語本文」の枠から外さなくてはならないと演繹推論するのである。これがもし妥当な推論でないのであれば、そもそも「読み聞かせる女房」を枠の外に置くことが理論的にまずいのではないかと同氏は推理する。実際、玉上（一九六〇）という本では次のように少々違った図が示されている（玉上、二〇七頁）ことを同氏は示す。ここでは「読み聞かせる女房」は「現存物語本文」の枠線上に重なっている。

（5）

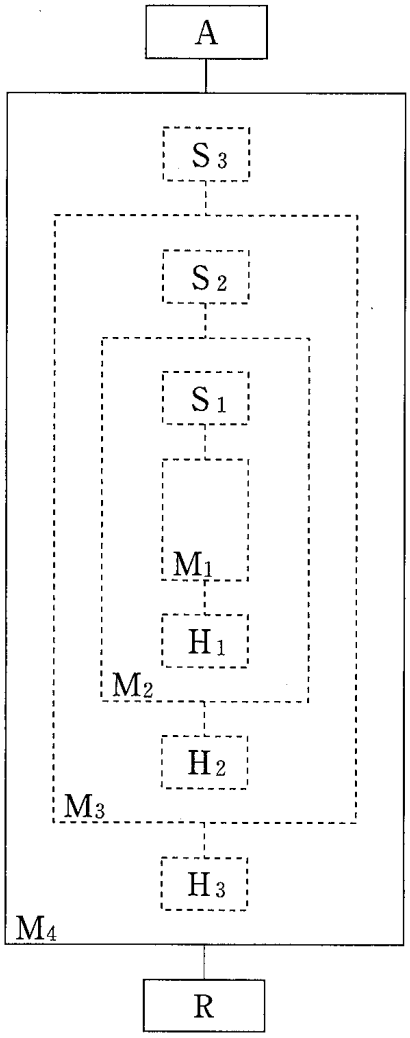


しかしこれもまた、他の二人の「作者」に同様に適用しなければならないと栗原は推論する。従って、この図でも問題は解決されていないことになる。

第二に、同氏は「読み聞かせる女房」を「現存物語本文」の枠内に繰り込むことを考える。すると、読み聞かせる相手、即ち「暗黙のうちに想定される「聞き手」」をも本文の中に繰り込まなければならないと推論する。しかし玉上の図はそうはなっていないのである。

これらの問題点を同時に解決する案を、栗原は次のような図で示している（一七七頁）。

（6）



（現存物語本文）

AとRとM4は「実在物」であり、それぞれ現実の製作者、現実の享受者、現存物語本文（異本）であるという。M1は作品の核に当たるもので、S1、S2、S3はそれぞれ古御達、筆記・編集者、読み手一般であるという。S1はH1に語り、H1たちの中に筆記・編集者S2になる者がおり、それを読む者がH2である。S3は少し解りにくいが、他者に読んで聞かせる場合はH2とS3が同一人物であり、H3に向かって読み聞かせる。自分一人で読む場合はH2とS3とH3が全て同一人物である。

この栗原の改善案は、理論的にすっきりしていると評価できる。そして、数々のHとSは〈機能〉であると解釈できるところがある。なぜなら同一人物が兼ねることもあることが想定されているからである。但し三人の作者を一応〈実体〉として捉えているようにも見える。

第二節　問題点の考察

以上の諸説と玉上説との間で、どこが問題のポイントになっているのだろうか。それはこれまでに示唆してあるのだが、玉上の「作者」を〈実体〉として捉えるか〈機能〉として捉えるかということであろうと思う。第一節第一項の諸説はみな、〈実体〉として三人いるという見方に反対しており、一人の主体が担いうる〈機能〉の数々として捉えようとしている。第二項の青山説も〈機能〉として捉える点では共通している。但し三谷（二〇〇七）説は、「語り手」を「機能」と捉えるのだが、氏の五人の「語り手」を〈機能〉として捉えて〈実体〉として一人でもありうると解釈することは、意外に困難で、複数人の〈実体〉が想定されているかもしれない。もっとも、中野説のように「技巧」として扱うことが許されるなら、〈機能〉説の内に入れることができる。

また第三項の栗原説は、少なくともH2とS3とH3の関係は〈機能〉である。

以上考察したように、玉上の「作者」を〈機能〉として捉える見方があることがわかった。これは別段目新しいことではなく、中野（一九七一）の「音読論は、抽象的な理論としての方がすばらしかったように思う」（九五頁）という発言は、そのような意味に理解することも可能である。こうした〈実体〉と〈機能〉との食い違いの原因について、次に別の角度から考察することとする。

第三章　玉上の「作者」とは

第一節　「作者」の曖昧性

前章で考察した食い違いは何に起因するものであろうか。その大きな理由として、「作者」という用語の曖昧性が挙

げられる。具体的な言語表現に対して、「作者」が果たしていると思われる機能として、最低限次の二種類が想定できる。

（7）・表現を製作・確定する者[注四]

・表現の内容（情報）を知っている者

例えば、「語り伝える古御達」が「作者」であるということは、次のどちらを玉上は想定していたのだろうか。

（8）A古御達の作った言語表現が、そのまま現存本文に残存している。

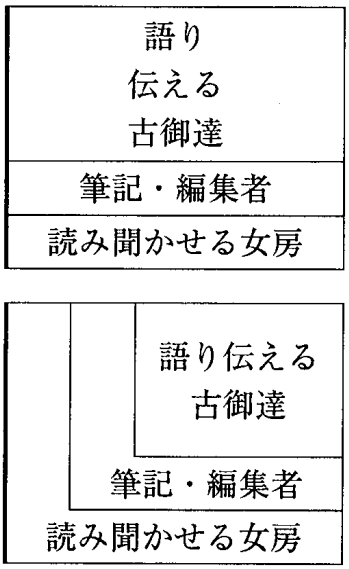
B古御達はあくまで「筆記・編集者」に語ったのみであり、表現は「筆記・編集者」がかなりの手を入れていて、そのままの表現は殆ど残っていない。「読み聞かせる女房」も同様である。

「読み聞かせる女房」には「自由裁量」の余地があるとされているとはいえ、その裁量は草子地の類を付け加えるか、本文を省略するだけであって、要約したり創出したりして新たな表現を生み出すことは想定していなかったとも考えられる。そう考えるとAの解釈が成り立ちそうである。しかし、「自由裁量」を素直に解すれば、Bの解釈が想定されていたかにも見える。ここではAの解釈を「切り貼りモデル」、Bの解釈を「語り直しモデル」と呼ぶことにしよう。

第二節　二つのモデル

「切り貼りモデル」と「語り直しモデル」を図示すると、次のようになる。それぞれ左端の太線が最終本文を表す。

（9）切り貼りモデル　語り直しモデル



切り貼りモデルではそれぞれの「作者」の製作した表現がそのまま残存する。一方、語り直しモデルでは新しい「作者」の製作した本文しか残らず、元の「作者」の製作した本文は、単なる情報ソースとして使われるにすぎない。たとえ元「作者」の表現をそのまま利用したとしても、新たな「作者」による表現と見なさなければならない。それば かりか驚くべきことに、地の文も会話文もどちらも新たな「作者」の製作した本文ということになる。つまり、ここでいう「作者」は今では「語り手」に相当するものと考えられているのだが、登場人物の会話文も「語り手」の表現になるということである。(注五) これは俄には受け入れにくい結論である。もっとも、これは驚くに値することではないのかもしれない。なぜなら、切り貼りモデルの場合でも、最初の古御達は「筆記・編集者」に向かって、光源氏の発言を自らの声で語ったはずだからである。これは日常会話において普通に行われていることであり、語り直しモデルが自然であることを示す。

以上のように、一見不思議に感じられた語り直しモデルが文学表現にも日常会話の表現にも自然であることが推定された。次に、日常会話表現を主に扱う社会学や言語研究との関連を見てゆく。

第四章　社会学・言語研究との関連

本稿の表題に「語用論的意義」と書いたが、言語研究の語用論の分野で本稿で問題にした点が論じられているかというと、必ずしも主要なトピックとして扱われていないようである。一方、社会学では相互行為（interaction）が論じられており、その中には参考になるものを見つけることができる。両者に跨がる分野として会話分析がある。

会話分析の見方を用いた場合、玉上説にはある問題が明らかになってくる。それは、もし現存本文が「上演台本」なのであれば、音読を想定するとしても描かれた仮想の場面ということになり、それは音声媒体ではない。逆にもし音読の際の台詞が忠実に記録された文字媒体であるならば現存本文は不自然であるということである。なぜなら、音読とは言っても練達の朗読家が完全原稿を朗読するのではなく、多少の「自由裁量」が加わっていると玉上は想定す

るのであるから、その際、普通は言い間違い、訂正、言いよどみ、フィラー、聞き手との間で交わすあいづちなど[注六]が生じているはずである。しかし現存本文には、誤写はあってもフィラーやあいづちの書き込みは皆無か、不自然なほど僅少である。これは音読の忠実な記録ではなく、あくまでも文字媒体として整形された本文であることを示している。

従って、以下、本文に描かれていると想定される仮想の音読の場面と、整形された文字媒体を読書する場面との両方を想定することとする。

第一節　ゴフマン（一九八一）

Goffman（一九八一）には「フッティング」ないし「参与役割」という概念がある。その中で「話し手」に当たる概念を三つに区分している[注七]（一四四・二二六頁）。

(10)・animator（発声体）
・author（文章作成者）
・principal（見解保持者）

それぞれの概念の要約説明は本田（二〇〇四a）・（二〇〇四b）・串田（二〇〇六）の間でも差異があり、的確に述べにくいが、「発声体」は物理的音声の発生源であって、ラジオ番組の聴取では機器としてのスピーカーを指す。「文章作成者」は言語表現の作成者のことであって、ラジオ番組では原稿の作成者等がここに該当する。「見解保持者」は立場・スタンス・信念の責任を持つ主体のことであって、ラジオ番組ではアナウンサー個人のみならず、会社全体や番組のスポンサー等も該当する。

この概念を〈三人の作者〉説に当てはめるとどうなるだろうか。語り直しモデルで考えると、「語り伝える古御達」と「筆記・編集者」は対応なし、「読み聞かせる女房」は、音読の現場では「発声体」と一部「文章作成者」に対応するだろう。一方文字媒体を読む場合、「発声体」は「読み聞かせる女房」とは対応せず、写本の書写者[注八]やテキストの印刷所に対応するであろう。そして「読み聞かせる女房」に対応するのはテクストから窺えるにすぎぬ「文章作成者」に

なるであろう。最後に「見解保持者」に対応するのは、『源氏物語』の作者に対応するであろう。

（10）の三類型は、〈実体〉として分かれている場合もあるが、同一の実体が〈機能〉を兼ねる形になることも多い。ゴフマン以前にこうした区別があまりなされなかったのは、日常会話では特に、一人の話し手が兼ねるのが普通なので、〈実体〉として分かれていないためであったと思われる。

第二節　野村（二〇〇〇）

野村（二〇〇〇）では談話の分析に際し、「参加者」と「観察者」という概念を用いて、次の四つの概念を提示している。提示の順番は便宜上改めた。

（11）・テクストの参加者
　　・テクストの観察者
　　・コミュニケーションの参加者
　　・コミュニケーションの観察者

ここでは「参加者」のみに触れる。「テクストの参加者」とは、テクスト中に指示される人物のことで、物語ならば登場人物である。一方「コミュニケーションの参加者」とは、実際に話し手・聞き手等として振る舞っている者である。

これを〈三人の作者〉説に当てはめてみる。「テクストの参加者」は、登場人物は勿論のこと、「語り伝える古御達」「筆記・伝達者」「読み聞かせる女房」もまた参加者として存在しているようである。「コミュニケーションの参加者」は、音読の場合、読み聞かせている女房とそれを聞く姫君である。文字媒体を読む場合は、読書する女房はこれに当たるが、テクスト中の「読み聞かせる女房」はそうではなく、「テクストの参加者」にすぎない。このように、音読と読書とで「読み聞かせる女房」の位置づけが違ってくるのである。

なお野村の区別も、基本的に〈機能〉の概念と捉えられる。

第三節　社会学・言語研究上の意義

以上のように、社会学や言語研究での相互行為論や会話分析を用いて〈三人の作者〉説を検討した場合、〈機能〉として捉えることによって、互いの共通点と相違点を捉えることができるようになると思われる。文学理論にしろ、言語理論にしろ、「表現主体」とか「話し手」（Speaker）といった十把一からげの概念を用いては、共通点は勿論、相違点も明確にならないと思われる。本研究は、どちらの学界に対しても概念の精緻化とその共通理解を求めるものである。

しかし新たな問題点が浮かび上がってきたのであった。「読み聞かせる女房」の概念を、実際に音読している主体として考えるのか、テクスト中に存在が窺われるにすぎない主体として考えるのかが曖昧であるということである。言い換えれば本当に音声媒体として物語を捉えるのか、実際には文字媒体であるとして捉えるのかという問題である。それぞれの捉え方によって、想定される送り手―受け手の存在する「場」や「場面」[注九]が異なるのだが、ともすれば混同してしまいがちである。

では言語の研究において、「場」「場面」の混乱した分析が行われがちになるのはなぜだろうか。理由の一つとして考えられることは、人間は一般に「図」に注目している時は「地」の存在に気づかないということなのかもしれない。別の理由としては、言語というものが本質的に「記号」であって、複製・再利用がなされるものだということが挙げられる。複製・再利用がなされるため、異なった場面に使い回しができるのである。即ち、「古御達」が語り伝えた表現が、少しずつ語り直されながら現存物語本文に残ったり、「読み聞かせる女房」の音読した台詞がそのまま文字化される（実は錯覚であるが）ということである。[注一〇]

終章

本稿で主に論じたことは、玉上の〈三人の作者〉を〈実体〉として理解するのではなく〈機能〉として理解し直す

ということであった。そしてそれが「語り直しモデル」で理解することができそうなことも指摘した。そしてしかしながら物語享受の場面として音読場面を想定するのか、音読場面の描かれた文字媒体の読書場面を想定するのかという問題があり、その原因として「表現の複製」という現象が関係することを示唆した。

表現の複製というのは「引用」ということでもある。但し「引用」といっても、クリステヴァ（一九八三）の言うような「引用のモザイク」（六一頁）という文中の一部分の語句ないし内容の似通いのレベルと、全文が引用から成っていて作品全体が引用されているものとは最低限区別されるべきである（福沢（二〇〇五））。全文が引用になっている場合、その後に引用標識を加えることによって引用構文にすることができる。ここから作品の享受論と文法論（統語論）との接点を探る必要が出てくるが、本稿では触れる余裕がない。引用と話法に関しては、「自由間接話法」や「体験話法」と呼ばれる現象が文学研究でも文法研究でも論じられており、研究史上も問題を含む概念であるが、これも本稿では触れる余裕がない。「筆記・編集者」や「読み聞かせる女房」の付け加える「草子地」の部分は、センテンスのレベルでは渡辺（一九七一）の「誘導の職能」と類比的であり、この関係についても論じたいが本稿の範囲外になる。統語論との関係については、林（一九六〇）・南（一九七四）（一九九三）では文中の要素の相互関係や発話と「場」「場面」との関連についての詳細な分析がなされており、このテーマとの関係についても触れるべきであったが、これも余裕がない。また、音声の語りという点では平家物語に代表される琵琶法師の語りや、筆記・編者者という点では説話集なども今後は視野に入れる必要がある。

〈三人の作者〉説が提示されて既に半世紀以上経っている。既にいくつも反論が提出されたり、この説を敷衍したと思われる論考も数多く出ているので、今この時期に取り上げる必然性は小さいかもしれない。しかし言語研究者の目から見るとまた違った側面が浮かび上がってくるものと思い、及ばずながら筆を執った次第である。

注

（一）中野（一九七一）、青山（一九六五）、栗原（一九八八）など。

（二）「物語を話している人」「物語を聞いている人」「物語を書いている人」と言ったり、「話し手、聞き手、書き手」と言ったりするところがある。

（三）中野（二〇〇一）では、当時の「作者」は現在なら「語り手」と訳するべきだとしている。

（四）この他に、「作品を統一する主体として読者と対峙する者」という機能も想定できるが、ここでは触れる必要がない。

（五）栗原（一九八八）は「本当は、登場人物のことばも、語り手のことばも、書き手のことばも、すべて、書き手に寄りそう作者のことばであった。」（二〇四頁）と述べる。

（六）これらはメイナード（一九九二）・山根（二〇〇二）などを参照。

（七）訳語は本田（二〇〇四b）を参考にしたが、串田（二〇〇六）では別の訳語が当てられており、定訳はないようである。なお本田（二〇〇四b）で用いられた「作者」という訳語は本稿では紛らわしいので「文章作成者」と言い換えた。

（八）『源氏物語』の語りに関して文字媒体としての側面を再評価したものとして木村（一九九九）・陣野（二〇〇四）がある。

（九）高橋（一九五六）は「場」と「場面」を区別して明確に定義する。

（一〇）音声や肉筆の場合は容易に複製するわけにはいかない。但し録音音声の編集、撮影画像の編集の場合には、「記号」ではないにもかかわらず、複製という側面では言語と似た現象を起こすものと思われる。

参考文献

青山克弥（一九六五）「源氏物語における表現主体の位置と草子地」『学葉』七号（『源氏物語　語りと表現』（日本文学研究資料新集5、三谷邦明・東原伸明編、有精堂、一九九一）所収本による）

今井卓尓（一九五四）「物語創作の過程」『国文学研究』九・一〇

金岡孝（一九八九）『文章についての国語学的研究』明治書院

木村朗子（一九九六）「『源氏物語』における〈書く〉こと」物語研究会（編）『源氏物語を〈読む〉』若草書房、新物語研究4

串田秀也（二〇〇六）『相互行為秩序と会話分析　「話し手」と「共―成員性をめぐる参加の組織化』世界思想社

クリステヴァ、ジュリア（一九八三）原田邦夫（訳）『記号の解体学セメイオチケ1』せりか書房

栗原裕（一九八八）『物語の遠近法』有精堂

陣野英則（二〇〇四）『源氏物語の話声と表現世界』勉誠出版

高橋太郎（一九五六）「「場面」と「場」」『国語国文』二五―九
高橋亨（一九八二）『源氏物語の対位法』東京大学出版会
高橋亨（一九九一）『物語と絵の遠近法』ぺりかん社
玉上琢弥（一九六〇）『物語文学』塙書房
玉上琢弥（一九六六）『源氏物語研究』角川書店、源氏物語評釈別巻一
中野幸一（一九七一）『物語文学論攷』教育出版センター
中野幸一（二〇〇一）「物語音読論の評価と現在」増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成第七巻源氏物語と物語論・物語史』風間書房
野村真木夫（一九八九）『日本語のテクスト――関係・効果・様相――』ひつじ書房
林四郎（一九六〇）『基本文型の研究』明治図書出版
福沢将樹（二〇〇五）「引用について――全ての言葉は潜在的に引用されている――」『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』五三号
藤村潔（一九六六）『源氏物語の構造』桜楓社
本田厚子（二〇〇四a）「テレビ討論における司会者の役割　討論の「進行管理」はいかになされるか」三宅和子・岡本能里子・佐藤彰（編）『メディアとことば1　「マス」メディアのディスコース』ひつじ書房
本田厚子（二〇〇四b）「「話し手」と「聞き手」（Speaker & Hearer）」同上
三谷邦明（一九八九）『物語文学の方法I』有精堂
三谷邦明（二〇〇七）『源氏物語の方法〈もののまぎれ〉の極北』翰林書房
南不二男（一九七四）『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（一九九三）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
メイナード、泉子・K（一九九二）『会話分析』くろしお出版
山根智恵（二〇〇二）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
吉岡曠（一九九六）『物語の語り手　内発的文学史の試み』笠間書院
渡辺実（一九七一）『国語構文論』塙書房
Goffman, Erving. (1981) *Forms of Talk.* University of Pennsylvania Press.